(5) 交通の発達

高知の交通　四国山地と海にかこまれた高知県の交通は、不便で陸の孤島といわれていました。これを変えたのが〝道路知事〟といわれた第八代知事田辺良顕でした。田辺知事は、産業をさかんにして文化を発達させるには、交通をもっと便利にしなくてはと考え、道路づくりと浦戸湾を改修して良い港にしようとしました。これが今、四国四県をむすぶ国道のもとになったのです。

交通機関として、人力車は1871（明治４）年、自転車は1883（明治16）年、市内電車は1904（明治37）年、自動車は1910（明治43）年から使われだしました。海上交通は、阪神方面とのつながりが深かったため、いちはやく始まっていました。

土讃線の開通　陸の孤島といわれた高知県の鉄道の開通はおそく1924（大正13）年、３月でした。高知で鉄道開設の要求がおきて31年目、日本に鉄道がしかれて50年目のことでした。この年、須崎・日下間が開通、12月には高知、次の年には土佐山田まで延びました。

しかし、四国山地の横断には、その山々をけずり取り、トンネル(当時103ヶ所）をほらなくてはなりませんでした。機械もたいしたものではなく、ほとんど人の力だけがたよりでした。結局10年の年月を費やし、須崎と高松を結ぶ土讃線の開通式が行われたのは、1935（昭和10）年のことで、高知県民の喜びようはたいへんなものでした。

土讃線開通のようす

土讃線開通のあゆみ（四国鉄道七五年史ほか）

大正十二年五月　琴平～讃岐財田（開通）
〃十三年三月　須崎～日下
〃十三年十一月　日下～高知
〃十四年十一月　高知～土佐山田
昭和四年四月　讃岐財田～阿波池田
〃五年六月　土佐山田～角茂谷
〃六年九月　阿波池田～三縄
〃七年十二月　角茂谷～大杉
〃九年十月　大杉～豊永
〃十年十一月　豊永～三縄
（高知～高松開通）
〃十四年十一月　須崎～土佐久礼
〃二十二年十月　土佐久礼～影野
〃二十六年十一月　影野～窪川
〃四十五年　中村線開通
〃四十九年　予土線開通

高松・琴平間の運ちんのうつり変わり

年	運ちん	米一升のねだん
明治四十三年	四十六銭	十四銭
昭和十一年	六十九銭	三十銭
昭和二十一年	十一円	五円五十銭
昭和三十一年	九十円	一〇九円

●一升はおよそ一・八リットル

(6) 米そう動と労働・農民運動

米そう動　第一次大戦のおわりごろ、米の不作やシベリア出兵のために米がたくわえられたり、米商人が買いしめたため、米の値が急に上がり、国民の生活は、大変苦しくなり、生活に困った人々は、各地で米屋におしかけたり、金持ちの屋敷をおそうなどのさわぎになりました。

高知市でも『急告』という題で、「米はますます値上がりをする。人々は近いうちに餓死してしまうだろう。市長や金持ちは何をしている。米の値段に苦しんでいる者は、高知公園に集まれ。」という紙がけい示板や電柱にはられました。これをみた市民250人余りが高知公園につめかけ、米の値段を20～25銭に下げよとさわぎだしました。市民は、市長の家や金持ちの屋敷、米屋などにおしかけ、米を値下げするように話し合いをしました。その数は1,000人余りにふくれあがり、ついには軍隊が出動するさわぎになりました。

やがて、国からのお金や寄付などにより米の安売りなどの援助が行われ、さわぎはいちおうおさまりました。しかし、この人々の力は、その後の社会運動や政治運動に発展しました。

労働運動　大正のおわりから昭和のはじめにかけて、労働者の意識がめざめ、高知県でも生活向上をめざした労働運動が進められました。

1926（大正15）年には、県下最初のメーデーが行われ、労働組合同盟も結成され、鉄道や製紙業などではげしい運動が行われました。

これらの労働運動で指導的立場にいたのが高知市出身の安芸盛でした。盛は、さきの米

安芸盛

そう動で大衆運動にめざめ、働く者の団結、すなわち労働組合の必要をうったえました。盛(さかん)の情熱と行動力は、当時の人びとに大きな影響をあたえました。

農民運動　1922（大正11）年には、日本農民組合が生まれ、小作人の利益をまもる運動が強くなりました。高知県の農民運動として、1929（昭和４）年に産米検査(さんまいけんさ)反対運動がおこりました。これは、県が米の規格を統一し、米の商品価値を高めようとするものでした。しかし、この制度は農民にとって大変不利益なものでした。とくに二期作を行っていた農民にとってはいた手でした。

南国市長岡出身の衆議院議員大石大(まさる)は、農民によびかけ、高知市で二万人の反対集会を開き、産米検査制反対を決議して、知事にこの制度をやめるよう要求しました。その結果、ついに取りやめさせることに成功しました。

この成功は、農民に大きな自覚をあたえ、各地に農民組織が結成されるようになりました。

大石大は、1878（明治11）年に生まれ、西野地小学校を３年で退学し、その後は独学をしました。大人になって村役場につとめたり、警察官、先生などをした後、鉄道会社の社長になりました。その後、衆議院選挙に立候補して、５回も当選しました。

大石大の胸像（南国市役所前庭）と誕生の地の碑（長岡陣山）

(7) ライオン首相―浜口雄幸

県出身初の首相　1929（昭和4）年、田中政友会内閣にかわって民政党内閣を組閣したのは、高知県初の首相、浜口雄幸（高知市五台山）です。

雄幸は、1870（明治3）年、五台山村（高知市）の水口家に生まれました。幼いころから口数少なく勉強好きで、母のきびしい教育を受けてものに動じない性格であったといわれます。ふだんは口数の少ない少年でしたが、ひとたび自分が不利な立場におかれると、筋道を立てて反論し、じっくりとねばり強く、最初の努力を持ち続けたといわれています。彼の一生は努力につぐ努力であり、それは小学校時代から始めた読書への熱中や、勉強への意欲的な取り組みの中でやしなわれたものです。

高知一中に入学後、雄幸は、家から学校まで往復約15kmを毎日げたをはいて歩いて通学しました。また、努力して3・4年をとびこし5年間の修学年限を3年間で卒業したほど成績も優秀でした。

高等学校の学生の時、安芸郡田野村の浜口家の養子になりました。当時は、板垣退助がつくった立志社をはじめ数多くの政治結社がつくられ、自由民権運動の波が高まっていました。雄幸もしだいにこうした運動に関心を持ちはじめ、政治家への道をこころざしたのです。東京大学卒業後、大蔵省の役人をつとめ、1915（大正4）年に衆議院に初当選しました。

以後、大蔵・内務大臣を歴任し、ついに総理大臣となりました。そ

浜口雄幸誕生地（高知市五台山）

の風貌と性格からライオン首相といわれました。

軍縮外交　浜口内閣がスタートした1929（昭和４）年は、株式の値段の大暴落をきっかけにしてはじまる世界恐慌という不況の大波が荒れた年であり、国内の産業は混乱し、社会の不安がいっそうつのってきた年でした。会社がつぶれたり賃金が引き下げられたり、職を失う人もふえてきました。浜口内閣の不況対策は、積極的でしたが、こうした社会の中ではどうすることもできませんでした。

また、この経済問題と取り組んでいる時、政治の面でぶつかった問題は、1930（昭和５）年のロンドン会議において、日本の海軍の軍備を少なくしようとしたことでした。海軍はもとより、大陸への進出をねらう陸軍の人々は、当然反対をしましたが、浜口内閣はこれらの反対をおさえて、この条約は国会で承認されました。それは雄幸の政治にのぞむ強い姿勢と決断によるものでした。

このように浜口内閣は、民主主義にとって大きな足あとを残しました。しかし、この年の11月、東京駅で浜口内閣に不満をもつ右翼団体の青年にピストルでうたれました。一命はとりとめましたが、雄幸は、この時の傷がもとで次の年、1931（昭和６）年になくなりました。

浜口雄幸邸（安芸郡田野町）